

科の動き

目白祭

はしがき

第二回の目白祭は、昭和二十九年十一月三日〜五日の三日間に亘つて、本学校内に於て行われ、社会福祉学科は、社会福祉学科研究室にて、研究が発表された。

今回の研究テーマは、昨年第一回の目白祭の経験より、あらゆる角度から検討且つ反省して科全員で熟慮して得られたものである。即ち、昨年のそれが科学性を欠いていた点に対し、学生としての立場を充分考慮し、学問的に問題を研究すべきである事、更に一つの問題をとらえ、一年生より四年生迄全員参加協力する事に、同意したものであつた。

一、研究テーマ『問題地域の分析』の意図

今日の社会問題の多くは、一時のジャーナリスティックな波にのせられ、やがて置き忘れられ、或いは私達より離れた別の所のものとして受け取られ勝ちな印象を与えている。これは今日の国民全体の何らかの欠陥である。その多くは、こうした問題を一部の専門家や篤志家のみにゆだね過ぎ、あまりにも社会問題に対して無関心であり、自覚が不足する点である。この様な状態では、良い社会が造られる筈がない。ここに、本当に社会改善を行うためには、一刻も早く国民の正しい自覚が必要である。その為には、ややもすれば

忘れられがちになる、隠された社会の面をもつて、単なる事件現象の羅列ではなく、その原因をついて、『どうあつてはならぬ』という意気に燃え上らせる方法で、観客達に、問題を与えよう——これが当研究テーマをもつて私達の意図したものであつた。

二、問題地域の分析の内容

(1) 人身売買——表ざたには殆どならないが不況と共に実際には広く全国に亘つている人身売買の現状を、職業、年齢、生活状況等の統計をもつて示す。更に、実例と一般的経路とによつて、その原因を明らかにしたものである。

(2) ドヤ街——戦後、とみに増加して来た犯罪の発生に対し、取締当局では直にドヤ街に手配する。ここに犯罪の巢と言われる山谷を中心に、何故山谷のドヤに、犯罪を犯す様な人が集まるかを心理学的に研究し、実態調査のもとに真相をつかんだものである。それは特に売春とヒロボンの問題であり、これ等の社会に及ぼす影響は如何なるものであるかを写真・図を含めて説明したものである。

(3) 飲楽街——都内の主なる飲楽街、つまり銀座、新橋、新宿、浅草を中心に調査し、その及ぼす影響を、年齢によつて分析してゐる。

更に、街商児童に重点を置いてゐる事は、青少年の各種の犯罪行為として今日重要な問題をもたらししてゐるだけに、大人への反省をうながすものとして研究してゐる。

(4) バタヤ——蟻の街、本木町地域、浮浪バタヤの三集団を中心に、その特徴をとらえ、労働、生活、扶助、娯楽、犯罪の各方面から現状を調査し、更にバタヤに流れ込んだ一人のケースをも、三集団について取り上げ、彼等の心理的面を描き出してゐる。

(内) 家出、浮浪——日本の大きな盛り場である東京、更に裏日本の支那である上野を中心に調査したものである。一方、各年齢別に、家出の原因をつきとめ、又保護の状況からも考察し、一例をとつて保護された者と、保護されなかつた者との行方を図解し、最後に、国としての家出、浮浪に対する対策に触れている。

(外) まとめ——実際の五つの問題の研究から、私達自身、一番強く感じた点、即ち、社会基盤である家庭問題と、それを取りまく社会環境に關し、実に多くの欠陥がある事でそれは私達国民の反省を必要とする処を指摘した。そして、最後に私達が行動に移すための、可能なものとして、人間相互の信頼の回復を、説いたものである。

三、当研究発表に対する観客の批判
意外に多かつた当研究発表に対する感想は『結論が弱い』という殆ど同一の批判をしている。これは私達自身のこれからの研究に、プラスさせた批判であつた。しかし、一方に於ては、学生としての立場をわきまえ、且つ研究方が良かつた等、私達が気づかなかつた長所を明らかに示して下さつた。いづれにせよ当研究発表が、多くの観客に關心を持たせしめた事は、誠に意義があつたと解し得よう。

一九五四年度の主な行事

五月 六日	社会福祉学科研究会発足
五月 七日	第一回 日本社会福祉学会開催 於大阪 菅教授出席
六月 一〇日	講演会 社会福祉学科研究会主催 早稲田大学教授 末高信氏 「社会保障について」
六月 二七日	当学科 卒業生縦の会
九月 二五日	当学科 卒業生縦の会
九月 三〇日	社会福祉学科研究会主催 研究発表会 講演 早崎八洲講師
一月 三日	「第七回国際社会事業会議」に出席して
一月 九日	——五日 目白祭
一月 九日	——十三日 全国社会事業大会
一月 一四日	——十五日 第二回 日本社会福祉学会 於 日本女子大学 日本社会事業短大
二月 九日	正午 社会福祉学科催物 第一回 花柳秀 古典新作発表会を後援 セツルメント建設資金募集のため

四、私達の反省

先に述べた様に、私達は研究に対し同一の意図を持つて、出発したが、実際に着手してからは、予想をどんどん裏切り、結果は、目的から大部はずれたものとなつてしまつた。それには、事務的な事等色々原因があつたが、しかし机上での予想と実態調査から得られたものとの差から初めて、その真相を知り方向を変えたものであつたから、単に失敗のみに解する事は、むしろ私達の認識不足ではないだろうか。

ここに、今年の目白祭に於けるあらゆる欠陥を充分に省みて、二度と同じ失敗を繰り返す事なく、又長所は一層それを伸ばし、学生の研究が如何に意義を持つかを再び認識して、来年の目白祭をより充実するために、その方針を、今から考察する必要がある。

(三年K生)

生江先生訪問記

本学部の将来についての生江先生の御意見

「時代に生きよ」

時に師走の風の吹き始めたある日我々三人は、大正年間わが社会福祉学科の前身社会事業学部新設、その進展、及び我が国社会事業発展に貢献された社会事業の元老、生江孝之先生を訪問する榮に浴した。先生は高血圧の爲「長い時間は」と禁じられたのであつたが一旦私達訪問の主旨、即ち社会事業学部設立当時の様子、及び現在の学部の問題に対する御意見を伺いたい旨を告げるや、先生の口をほとばしる御言葉はその止まるを知らず、延々二時間に亘つて御熱弁をふるわれたのである。第一次世界大戦後の社会は、富の偏向、物価騰貴から米騒動が勃発しこれが救済には、従来の一部富裕階級による慈善事業では事足りず、社会事業への進展をみたのであるが、この新しい政策に基づく第一の難点は、その指導者の不足であつた。この要望に答えて本学にも麻生学監、当時の学界の権威者である生江先生、高橋誠一郎先生、綿貫哲雄先生のもとに社会事業学部が設立され、以来世に優秀なる先登を送り出したのであつた。それが家政学部所屬となつたのは、昭和初期の「社会」と云う言葉の

中に共產主義を考えた世の人々の圧力を避ける一時の仮処置であつたに過ぎない。しかるに現在の社会は我々に一家庭の母のみならず社会の母となる事を要求してゐるのであり、それに答える為、我々は社会福祉学の内容をより拡充して、我が国文化国家再建の一翼を担うべきと痛感するのであるが、社会福祉学科が家政学部に属してゐる現状は変則的であり、この目的を達成するには甚だ不便を感じる。より良き母であると共に、否それ以上に、より良き社会の母となる事が選ばれた大学卒業者の使命であり、それをなす事がひいては故成瀬先生の御意志を現代に生かしたと云えるのである。

生江先生のお話はまだ続くが紙上の関係で止むなく先生の社会福祉学科を此の様に愛されている事を告げてこの訪問記を閉じよう。

(四年 S生)

◇ 生江先生は、昨年秋、八十八才の米寿のお祝を社会事業会館でなさいました。社会事業関係者、学校関係者等、多教集まり、極めて盛大な会でした。相変らず、朗々たるお声で、御挨拶をなさいました。現在「東京都渋谷区上智町二」にお住まいです。

☆

★

☆

★

★



編 輯 後 記

▲ 一号を、皆様のお手許にお配りしてから、早、一カ年たちました。その間の皆様の御批判、御激励のお言葉を心から感謝致して居ります。

▲ 二号は、一応出来上つた一号の形を基に、より「充実」したものと考え、一つ一つの記事を、大事に扱つたつもりです。

▲ 殊に「学生のページ」として「学生の作品」を多く載せました事については、それぞれの御意見もおありでしょうが、どうか先輩の皆々様は、温かい眼をもつて育てて下さいます事を、又、在学生は何らかの刺戟を感じて下さいませ事を、心から願つてやみません。

▲ 教授の先生方、卒業生、在学生それに、研究室が一体となつて「真理」の探求に邁進したいと云う願いを、如何に、この機関誌に具体化するか、何卒今後共皆様が考へて下さいませ。

▲ 別冊として、「社会調査」の実習報告書を、希望者の方に出来上り次第お配り致します。

▲ 松本先生は、無事二年間の留学をおえられ、今年の七月には御帰国になります。

▲ 本誌のカット及び表紙の面は、前号と全じく、四三回生高村さんの御夫君から、寄贈して載せました。

「社会福祉」第二集

昭和三十年二月五日印刷
昭和三十年二月二十日発行

編輯人 菅 支 那 子
発行人

東京都文京区高田豊川町十八

発行所 日本女子大学
社会福祉学科
印刷所 太田書房